

不登校への対応

～寄り添って、待つこと～

不登校者の数が増加の一途をたどっています。文部科学省では、令和6年度に不登校の要因調査を実施しました。その調査結果によると、不登校の児童生徒とその保護者の回答は同じような傾向を示しているのに対して、教職員は少し違う見方をしているようです。

具体的には、児童生徒と保護者の上位3位の回答は、「不安・抑うつへの訴え」「居眠り、朝起きられない、夜眠れない」「体調不良の訴え」であるのに対して、教職員の上位3位の回答は、「学業の不振」「宿題ができていない等」「制服、給食、行事等への不適応」でした。このように、両者の回答には隔たりがありました。

不登校の要因は多様であり、特定することは困難だと思います。私は、不登校の要因を究明することも大事だと思いますが、学校としては児童生徒の気持ちに「寄り添う」という態度こそが、一番大切なポイントだと思っています。

私の経験からお話しします。まずは、辛い失敗談です。私が担任していた学級の中学2年生の生徒が不登校でした。中学1年生から続いていて、中学3年になっても登校できない状態でした。私はよく家庭訪問をして、本人と母親と私との3人で、いろいろな話をしました。

そんなある日、その生徒が突然、「先生、明日から学校に行ってみよう」と言うではありませんか。母親と私はとても嬉しくなり、翌朝、意気揚々と迎えに行きました。本人は登校の支度を済ませ、玄関まで出てきていましたが、どうしても外に出られま

せん。一歩が踏み出せないのです。私は、このチャンス逃したらだめだと焦って、「昨日、約束したじゃないか」と言って、腕をつかんで強引に外に出そうとしてしまったのです。やってはいけないことでした。その華奢な体のどこからこんな力が出るのだろうと思うほどの力で、その生徒は玄関ドアの枠をつかんで動きませんでした。私は、はっと我に返り、なんてことをしているのだろうと思いました。すぐに手を放し、謝りました。結局、その生徒は卒業まで学校には来られませんでした。悲しく辛い思い出です。私はとても未熟な教師でした。

このような経験を経て、私なりに、生徒の気持ちになって考えてみることで、つまり生徒の気持ちに「寄りそう」ことの重要性を考えるようになりました。

そんな中、転任した学校で、中学3年生を担当していた時、私の学級に、ある生徒が転入してきました。その生徒は、初めから学校に来られない状態でした。家庭訪問を繰り返し、何とか保健室登校ができるようにはなりました。しかし、午前10時ごろに登校し、保健室で給食を食べ、午後2時ごろに下校するという日々が続きました。

私は以前の苦い経験から、その生徒には決して無理強いをしないと決めていました。「よく来たね」と言って、できる限り保健室と一緒にいるようにし、給食も本人が嫌がらなかったのに一緒に食べ(教室は副担任に任せました)、帰るときには「また、明日!」と笑顔で見送りました。

生徒の気持ちに「寄りそう」ことを念頭において対応し、養護教諭も理解を示してくれていましたが、それでもあまりにも状況が変わらなかったのも、甘やかし過ぎではないかと言われたこともありました。管理職の意見も同様でした。しかし、あくまでも生

徒が自分の力で行動することが大切なので、こちらが余計な圧力をかけないようにして、彼女に「寄りそう」態度を続けました。

そんな日々が何日も過ぎたころ、ある日突然、その生徒が「教室に行ってみたい」と言ったのです。嬉しさ半分、不安半分でした。それは、前の経験があったからです。だから本人の行動に任せました。

すると、その生徒は自分の意志で教室に入ることができたのです。生徒たちは大歓迎して迎え入れ、その生徒もほっと安心したようでした。そして、そのまま卒業まで1日も休まず、遅刻もせずに登校することができました。卒業式の日、父親が大粒の涙を流していた姿を、今でも鮮明に覚えています。

このような経験から、私は不登校の児童生徒について次のように考えるようになりました。

不登校になる要因は複雑であり一様には語れないが、彼女ら彼女らに共通しているのは、学校に行くための“心のエネルギー”が少なくなっているのではないかということです。

一般に、元気に登校できる子どもたちには、登校できる“心のエネルギー”が一定量あり、多少のストレスがかかっても、そのエネルギーが不登校ラインを下回ることはないと考えています。

しかし、不登校の子どもたちは“心のエネルギー”が不登校ラインを下回っていて、なかなかたまらない状態です。外から圧力が加わると“心のエネルギー”がすぐに抜け落ちてしまいます。また、何とかエネルギーがたまって登校できたとしても、学校側が教室に入らせようとするなどの強い刺激を与えると、瞬間にエネルギーがなくなってしまいます。その結果、再び登校できなくなってしまうのです。“心のエネルギー”をためるには時間がかかり、な

くなるのは一瞬です。

そのことに気づいた私は、生徒の“心のエネルギー”がたまるまで、時間をかけ、ゆっくりと待ってあげることが、何よりも大切だと思いました。

「待つ」というのは、ほおっておくとは違います。教師と児童生徒の心がつながっていなければ、登校しようという“心のエネルギー”はたまりません。つながったうえで「待つ」、これが大切だと思います。つながるには、どうしたらよいのか、当時の私にできたのは、ただ一緒にいてやることだけでした。

仮に、エネルギーが登校ラインまでたまらずに、登校できないまま卒業してしまうこともあるかもしれません。それでもいいと思います。人生は長いのです。少しずつ“心のエネルギー”がたまっていき、いつの日か登校できたり、社会に出られたりすればいいと思うのです。そばにいてくれる人がいる、あるいは、そばにいてくれた人がいたという思いが、いつの日か“心のエネルギー”を充たしてくれると信じています。

苦しんでいるのは、子ども自身です。そしてその保護者です。そのことをいつも念頭において、児童生徒、保護者に「寄りそう」こと、それが教師の役割だと強く思っています。

市川三郷町教育長 渡井 渡

